

長田 博

野上裕生さんの急逝を悼む

アジア経済研究所を拠点に開発経済学の研究と普及に活躍された野上裕生さんが、本年五月二一日に五〇才の若さで急逝された。あまりにも突然だった。

彼との最初の出会いは二八年前、野上さんがアジア経済研究所に入所して統計部に配属された時で、七年間机を並べてアジア諸国の景気指標作成やマクロ計量経済モデルによる予測事業に精を出した。その後、私は研究所を去ったが、学会などで会う機会も多く、ハンチング帽をかぶって人なつっこい笑みを浮かべながら、右手を軽く上げて「やあ、どうもどうも、お久しぶりです。」といったちょっと前屈みになって近づいてくる野上さんの姿が、今も目に浮かぶ。

野上さんの研究成果が続々と出始めたのは、一橋大学大学院経済学研究科へのいわば「国内留学」を終えてからである。『アジア経済』などに多くの書評を書くことをきっかけとして幅広く開発問題の研究に取り組むと同時に、本格的な「貧困」研究を進めた。アマルティア・センの『不平等の再検討』（岩波書店、一九九九年）を池本幸生氏・佐藤仁氏と共に翻訳したことは「ライフワークのひとつ（野上さんご自身の述懐）」であり、彼の人間開発をめぐる「貧困概念」の研究の核となった。「貧困計測」研究の面ではUNDP「人間開発指数（HDI）」の多面的検討がある。こうして、野上さんの研究は人間開発を基礎に置いた「貧困概念の研究」「貧困計測の研究」「開発経済学の研究」の三つの糸に

より、独特の風合いを持つことになった。主たる成果は、『開発経済学のアイデンティティ』（アジア経済研究所、二〇〇四年）および『人間開発の政治経済学』（同、二〇〇七年）として発表された。その後の野上さんの貧困研究は、河上肇の『貧乏物語』の検討などへと広がり、倫理学をも包摂した「貧困の社会科学」を目指した。また人間開発を「開発経済学」に位置づけるために、経済学による彼の分析アプローチは「政治経済学」の色合いを増した。途上国をあまり自由に旅することができなかった野上さんは、努力によってそんなことを忘れさせるほど、書物と思考の世界を自由奔放に行き来し、それを楽しんでいたと思う。

また、野上さんは、一流の研究者でありながら、開発研究の成果普及に大きな貢献をしたことを忘れてはならない。この『ワールド・トレンド』でも、二〇一〇年から「すぐ役に立つ開発指標の話」が二四回連載されたことは記憶に新しい。野上さんは教えることが好きであった。貧困研究が一段落した三年前から、野上さんの研究は新たな分野に向かった。人口変化などの長期要因を考慮したアジアの長期経済成長モデルの研究である。研究所入所当時の研究の延長線上にあるもので、随分、意気込んでおられたのを覚えている。道半ばのままとなり、野上さんの研究の新たな展開が見られないのは誠に残念である。

野上さん、お疲れさま、そして、ありがとう。謹んで、哀悼の意を表します。

おさだ ひろし／帝京大学経済学部教授

1948年生まれ。アジア経済研究所統計調査部に19年間勤務。その後、名古屋大学大学院国際開発研究科を経て、2012年4月から現職。専門は国際経済学と開発経済学。